

身体性のセックス化と超セックス化 － または、性差をめぐるふたつの本質について －

Sexualization and Supersexualization of the Body
－ Or, on Two Essences Concerning Sex Difference －

小倉建二
OGURA, Kenji

生殖的な身体性の男女差に何らかの深い意味を認める立場は、家父長的保守主義からラディカル・フェミニズムにいたるまで、広く見受けられる。ジェンダー研究の主流派はそのような「(性差) 最大化論」に反対して、性差よりも個性を尊重し、性差の言説に潜む暴力的政治性を分析することに専念してきた。たしかにこういった批判や懐疑によって社会と学問は鍛え上げられたし、今後もそうである。ところが最大化論は分離主義の危うさをはらみながらも、依然として根強い人気を保つ。保健（生理現象や病気との付き合い）、愛、犯罪などの諸問題では、生殖的・エロスの身体性の男女両極性が圧倒的な現実味を帯びてしまう。くわえて進化生物学は、精子形成型と卵子形成型の違いが、身体にとって個体差に先立つ決定的な「本質」であることを強力に裏付けているかのようである。

本稿の主な目的は、生殖上の男女両極化に絶対的＝自立的な意味を与える進化生物学のあやまちを指摘し、両極化を調節するもうひとつの本質的な身体現象を明らかにすることである。そのために筆者は田中（貴邑）富久子（2004; 2008; 2013）と黒田公美ほか（2016）による脳科学の論考を足掛かりとして、身体性の「性分化」と「性差縮小」がどちらも生物学的・進化的な原理に基づくものであることを主張する。これによって最大化論と最小化論の二つの立場の限界を乗り越え、双方の強みを保持することができる。

1. 性差に関する先行見解の批判的概観

社会構築主義（social constructionism）のラディカルな立場では、男らしさや女らしさだけでなく、そもそも生物学上の性差自体が文化的・社会的な構築物とみなされる（Delphy, 1981 = 1996; Butler, 1999 [1990] = 1999）。その主張の根拠としてしばしば持ち出されるのが連続論である（Butler, 1999 [1990]: 140 = 1999: 196; 荻野 2002: 100–101; 上野 2008: 26–30 など）。ここでは、オス／メスの判別が染色体や内分泌や生殖器などの複数の次元にかかわる点を重視する。例えば遺伝子は XX 型や XY 型の他に、XXX や XYY などがあり、また内分泌の水準でも、より女性ホルモンの多い個体、もしくはより男性ホルモンの多い個体があるにすぎない。外性器も単純にヴァギナ型／ペニス型と二分できず、所謂「インター

セックス」や「性分化疾患」などの現象を確認できる。ゆえに、重層的で連続的な身体を男女に二分することは暴力的な操作にすぎないとされる。しかしこのような連続論は決して盤石の主張ではない (Cutter, 2006; Tuana, 2005)。なぜならホルモンの連続性や、生殖器の多様性を指摘したところで、統計上、精子形成型と卵子形成型の二つの多数派に分かれている事実は重いからである。Sax (2002: 177) も「人間のセクシュアリティは二分裂であって、連続ではない。人間の 99.98% 以上がオスカメスのどちらかだ」と批判している。

身体的特徴の一つ一つは文脈の中でしかそれ自体として意味を持ちえないので、生物学的な性差を別格扱いするのは政治的な特権化にすぎない、と見る構築主義的接近法 (Butler, 1994: 33-4; 千田 2006: 137) は、進化生物学や進化心理学の台頭によってゆさぶられた (Cocks, 2013: 70)。日本では特に長谷川真理子 (1993; 2008) が有性生殖の進化的な意味を強調し、「ジェンダー論」を攻撃した。

従来の通説によると、性の本質は「遺伝物質の混ぜ合わせをし、自分を少しずつ変えてゆく」ことにある (長谷川 1993: 28)。しかし多様で複雑な生殖現象を統一的に説明できる理論は提示されておらず、有性生殖が無性生殖と比べて具体的にどう有益なのかという点については、諸説紛々として定まらない (Cruzan, 2018: 333 ff.; 松浦 2003: 1702)。とはいえ、有性生殖の「意味」が「遺伝的自己の伝達」における何らかの「進化的有益性」にあることは確かだろう (高木 2014: 187-188)。自分の「種」としてのアイデンティティを保ったまま、複雑な身体を作り直し、複雑さを積み重ねてゆくことできるのは、有性生殖に特有のしくみである (団 2010)。ヒトの二倍体細胞 (ディプロイド) は減数分裂によって一倍体化してから受精 (再二倍体化) することで、ヒトの枠組みを変えずに緻密な構造を新しく再構成する。そして放出された配偶子にとっては卵子型と精子型に分化していることが、生存率と融合率の両面で、結果的に最も効率性が高い (長谷川 1993: 31-36)。

「性差がなぜ生じるかについては、配偶の機会の獲得をめぐる同性間競争、配偶者選択、雌雄の対立と葛藤の三つの軸から説明がなされる。」 (長谷川 2008: 146)

「『個性』というものの中に、『男であること』『女であること』は、消しがたく深く組み込まれている。それは、社会や文化が強制しているだけの表面的なものではない。生命という存在そのものに根ざした、それほど本質的で深いものである。性は、38 億年の生命の歴史を背負っているのである。」 (長谷川 2008: 152)

性差の存在の「究極要因」を重視する長谷川は、人文社会科学系のジェンダー論が有性生殖の進化的意味について取り上げない点を批判する。たしかに進化の仕組みを無視して、オス／メスの二分法を「生物学者による認知的操作」だの「欠性対立型言語カテゴリーによるジェンダー化」だのとは見なす態度 (上野 2008: 27-8; 千田 2006: 137-8) は単純すぎる。

個人主義の良い面が根づきにくい「ムラ社会」的日本では、「個性よりも性差」主義のしづきが深刻である。三砂ちづる著『オニババ化する女たち』(2004) の流行はそれを象徴

する。彼女は近代主義の個人観を批判し、女性性や子宮を生活の基本として受け容れるべきだと主張した。一部のフェミニズム研究者は三砂のセックス論の意味を深刻に受け止め、女性性神話への回収を警戒しつつ、生殖的身体の新しい理論化の必要を強調したのである（河上 2005；金井 2008；海妻 2008）。三砂の主張は、その科学的補強材を長谷川の進化生物学的性差論に求めることができる。ふたりの立場は「赤裸々な本質主義」とでも称すべきもので、三砂が野生的身体経験を賞讃し、長谷川が生命の進化史を重視するところは、動物臭いという意味で丸裸であるが、何より政治的流用に無防備な点でそうなのである。この露骨で生々しい本質主義に対抗できる身体理論を合理的に（しかも市民精神にふさわしい平明さをもって）練り上げることは可能か否か。少なくとも日本の思想界はこの問いを鋭く突きつけられているのではなかろうか。

本質主義（essentialism）という概念は構築主義と同様に多義的である。例えば「生物学の哲学」という分野では、ジェンダー論（あるいはフェミニズム）とまったく異なる使い方をする。ジェンダー論における定義はほぼ一定しており、次の通りである。

「女性のバイオロジーが、彼女たちの社会的立場や価値観や行動様式のもとになるという主張」（Stone, 2007: 140）

「ジェンダーにおいて、女性の（ないし男性の）規定可能な自然本性が存在し、人格、就労傾向、親になりたがる欲求などでの違いとしてあらわれる、という見解をとる。この本質的自然本性は生物学的に決定されていると見なされるのがふつうである。」（Burr, 2002 [1998]: 13）

この意味での本質主義は、ある事柄に関する（有意な）性差が、前社会的原理によるものなのか、社会的要因によるのか、両方の絡み合いの結果なのか、ということを議論する文脈で用いられる。例えばジェンダー・アイデンティティ（特定のジェンダーへの帰属意識）の形成について、生物学的要因を有力視する研究者もいれば、“bio-psycho-social”な過程と見る研究者もいる。また理数系分野の成績や人口比の性差は、非定型発達者（自閉症的天才）の存在を除けば、ジェンダー・バイアスの結果にすぎないとする見方が優勢である。

「女性の本質」に対するフェミニストの態度は次の四つに大別できるだろう。

一、すでに述べた通り、ラディカルな社会構築主義者たちは本質主義を完全に葬り去るべく理論化を試みたが、今日にいたるまで成功していない。J・バトラーはニーチェ流の主語批判をジェンダー論の中に導入した点で画期的であったが、身体の物理的個性自体を、性差もろとも社会的構築物に還元する彼女の企ては失敗に終わったと言わざるをえない。

二、主流派（リベラル・フェミニズムや「穏やかな」社会構築主義）は性や生殖をめぐる身体性の問題を論外に置き、性差よりも個人差を重んじ、本質や自然といった概念が政治的暴力装置としていかに機能してきたかを分析する。そのかわり「赤裸々な本質主義」を跳ね返すだけの身体理論は欠落している。

三、身体的性差の意味を「最大化 maximize」しつつ、男性社会に対するユートピア的分離主義を徹底したのがラディカル・フェミニズムである。例えば荷宮和子（2006）は男女の性行為の生理的な違いを重視し、女にとって「売春（＝慰謝料についての示談が事前に終了している強姦）」ではないセックスが出来る機会は非常にまれなことだ、という命題を引き出す。内容には立ち入らないが、彼女の議論は A・ドウオーキンよりも説得的で啓発的である。ただしラディカル・フェミニズムは、キリスト教コーカソイドとの全面対決を標榜したブラック・ムスリムの運動に似ていて、社会改革よりは意識革命の色彩が強く、地道な運動を支える思想としては有効性を欠く。

四、エコフェミニストの Y・キングや M・ミースたちは、女性の本質を何らかのかたちで認め、女性性神話に陥らないように注意しつつ、本質主義と構築主義の排他的な二項対立図式を乗り越えようとする。社会主義エコフェミニストは、自然および女性を自由財として搾取してきた資本主義を批判し、サブシステンス（地に足の着いた持続可能な生業）にもとづく経済体制の必要を説く。輸出用換金作物生産や原発エネルギーへの依存を断ち、「地産地消」型生産体制や再生可能エネルギー・システムの再構築の道を模索する運動は、その力の歴史的・文化的根源（現場の声）を、女性の「生殖＝再生産的 reproductive」身体の中に見出せるのだという。概してエコフェミニズムは「赤裸々な本質主義」と一線を画するものの、女性性神話とどこまで対立し、どこまで重複してしまうのか、という点で曖昧さを残す。ただし M・メラ（1992 = 1993）の母性批判は本稿の立場に近い。

これらの性差観は各々一長一短であり、どれも独特の魅力をもっていて、性差を捉えるわれわれの目を鍛え上げてくれる。ちなみに、専門的な哲学の方面では L・イリガライから後藤浩子にいたる「フェミニン」の理論化の試みがあり、また近年では「新しいマテリアル主義 new materialism」と呼ばれるフェミニズム理論も一部で盛んである⁽¹⁾。しかしこれらの研究はその筋の入り組んだものでしか通用しない高踏かつ難解なものであり、市民感覚からすれば全然“reasonable”（お手ごろ＝合理的）ではないため、今は立ち入らない。

有性生殖の進化的な意味を軽視せず、生殖的・エロスの身体の男女両極性を生活の基本条件の一つとして正面から受け止めた場合、「個性よりも性差」主義への傾斜は、必然でないにせよ、その可能性を否定できず、出産奨励主義との共犯関係も成り立ちうる。次節以降は、本質をめぐる様々な立場（社会構築主義からラディカル・フェミニズムまで）の長所をまるごと基礎づける身体理論の練り上げに挑戦し、長谷川流の進化生物学的性差論の一面観を批判的に検討する。

2. 新皮質と超セックス化

ヒトの脳を新しい部分と古い部分に大別する仕方がある⁽²⁾。どの部分を新旧に振り分けるかは研究者によって多少の違いが見られ、二分法の他に三分法や四分法などもある。脳科学者の田中（貴邑）富久子（2004; 2008; 2013）は、新皮質・大脳基底核・大脳髄質などを新脳

とし、間脳・中脳・脳幹などを古脳とするが、「機能的な根拠」から大脳古皮質の海馬を新脳に、大脳旧皮質の扁桃体を古脳に含める。新脳は知的・理性的な機能をつかさどる部分で、とりわけ新皮質はヒトにおいてもっとも巨大化している。他方、古脳は生命維持や本能行動や情動にかかわる。新皮質（前頭前野など）は本能や情動を制御・抑制するものとしても機能しうる（田中・長谷川 2006: 96；黒田ほか 2016: 22）。田中は脳の性差について次のような仮説を提示する。

「古い脳には構造・機能の明らかな性差が存在し、これは出生前に出来上がるセックスであり、新しい脳には出生時には構造・機能の性はないが、その後の養育や教育によって出来上がるジェンダーがある。」（田中 2008: 172）

「新しい脳にはどういうふうにもなりうるというプラスティシティ（可塑性）があつて、生まれてからの経験が構造や機能を決めてゆくので、性差ができてしまうかもしれないし、できないかもしれない」（田中・長谷川 2006: 90）

「古い脳には間違いなく性差があつて、たとえば思春期前の子どもは古い脳そのもので行動しているから、それは男の子の絵だって黒っぽいもの、戦車だとかを描くし、女の子は人形さんとかを明るい色で描く。（中略）子供のときには古い脳の扁桃体が遊ばせているからそうなるだけ」（田中・長谷川 2006: 100）

田中（2004: 181）によれば、新しい脳にはもともと構造・機能上の「大差」がないという意味で生物学的・生得的な性差がない。しかも生物学的要因によって幼年期に生じる思考・行動様式の性差や認知能力・記憶機能の性差は、新しい脳をめぐる社会環境次第で「縮小」できる（田中 2008: 178）。神経生物学者の C・ヴィダルも同様の見解を示す（Vidal et Benoit-Browaey, 2005: 43, 89–90 = 2007: 71, 149–150）。

しかし「古脳＝セックス／新脳＝ジェンダー」という田中の二分法は、いささか強引である。田中（2004: 188）は、新脳に有意な生物学的性差があるとする研究が「信頼に足る証拠」を欠くと述べているが、脳梁や頭頂葉、海馬などの構造・機能上の性差については今なお甲論乙駁で、脳の性差についてはまだまだ分からないことが多い（Arnold and McCarthy, 2016）。脳の性差の有無を調べる普遍的な方法論は確立されていない（坂口 2017: 107）。そもそも「機能的な根拠」から海馬を新脳に含める田中の仕方は、脳部位の新旧区分の指標を曖昧にする。

新しい脳に（有意な）セックスはないと仮定するよりも、新しい脳の最前線である新皮質が「超セックス化 supersexualization」の能力をもっていると見るべきである。まず本論では、各個体が卵子形成と精子形成の両極に向かって分化すること、さらにその分化に応じてなんらかの特徴が生得的に振り分けられることを、セックス化と呼ぶ⁽³⁾。その場合に超セックス化は、生殖上のメス／オスの違いに対して新皮質的なヒト（個人と社会）がとる対応や、対応の効果を意味する。接頭辞の「超 super」は桁外れをあらわすことも

あれば (e.g. *super-star*; *super-rich*)、超越的制御をあらわすこともある (e.g. *super-ego*; *super-individual*)。したがって超セックス化という概念も、全く異なる二つの作用に分けられる。ひとつは、雌雄の違いに応じてそれぞれ別個の文化的な意味を与えつつ、セックス化を補強・拡張してゆく過程をさし、本論ではこれを「ジェンダー化」(または「再セックス化」)と称する。もうひとつは、雌雄の別を反映する身の上の不均衡や身持ちの非対称を縮小・予防・無効化してゆく過程をさし、これを「非セックス化」と呼ぶことにする。人間は新皮質を媒介とする社会的生存において必ず超セックス化を行う。

可塑的な新皮質は「知性」や「認知的同感」の基盤である。言語・抽象化・推論などにおいて他の動物を圧倒する人間は、環境や生態系を自分の生存に有利なように改造することができ、その行き過ぎに悩みもする。また、人間はアカの他人の社会的な苦痛に対する同感 (empathy) を覚えることもあり、そのさい主に背内側前頭前野 (DMPFC) を活性化させるのだという (Meyer *et al.*, 2013; Wagner *et al.*, 2016; 長谷川 2018)。かくも驚異的な新皮質のもとで、ヒトの「生」と「性」が劇的にならないわけがあるのか。

3. ジェンダー化と非セックス化の具体例

性差医療では「女性医師の長所に注目し、その能力を生かした職場の開発も必要」(松田 2008: 255)とされる。これは女性医師特有の社会的役割を重視する点で、一種のジェンダー化である。また、女子大学の必要性や、階級としての女性の自覚、研究会での男性の排除などは、男性中心の文化を解体するために女性が団結するというかたちでの性差の重視であろう。ラディカル・フェミニズムやエコフェミニズムはセックス化の意味を新皮質的知性によって再定義するもので、われわれの人生観を鍛え上げるジェンダー化＝再セックス化といえる。当然ながら、土俵の女人禁制や「男は度胸／女は愛嬌」なども、お馴染のジェンダー化である。ジェンダー化が良いか悪いかは文脈次第なのである。

他方、非セックス化では、男女間の身の上の様々な不均衡・非対称・一方性が、色々なかたちで均等化されてゆく。「雌性個体が本来、妊娠し、子を産む能力を有する点においては、雄性個体とは絶対的に異なる」(東村 2008: 166)「やはり男の身体は妊娠しない」(金井 2008: 32)といった指摘は多いが、その能力の有無が具体的にどのような生活上の相違につながるのかを検討する必要がある。例えば遺伝的自己を複製できる点ではオスもメスも同じであるから、出産能力の有無は単なる自己複製方式の違いにすぎない。しかし男女間では性欲の仕組みや生殖可能年齢などが異なるし、女性の場合、新自由主義的労働市場に不向きなヴァギナの事情(不妊治療・卵子保存・更年期障害)や出産による就労の中断、マタニティ・ハラスメントなどがある。

生殖能力の性差が強調されるのは出産をめぐるまなざしや感動に関して、女と男が同等ではないからである。逆に言えば、もしもエロスの・生殖的な苦楽に男女の違いがなければ、ヴァギナの身体とペニスの身体の構造・機能上の性差は、さしたる意味を持たない。実

のところ、人間社会は生殖的両極化に対し様々な方面でその縮小を試みることができるし、げんに試みている。例えば乳幼児死亡率を下げることは女性の生涯出産数を下げることにつながるので、「産む性」である期間は短くなる。出産に関しては、向精神薬や麻酔やアクティブ・バースなどの様々な苦痛軽減策が発明・改良され、何より産前・分娩中・産後の行き届いた介助体制の整備が進んでいる（安心快適な現場づくり）。月経や更年期障害の主体的制御とそれを支援する環境の整備は、先進国の中で日本が大きく遅れている。共働き・ひとり親家庭の女性でも産みやすく育てやすい体制を整える自治体や企業の努力、マタハラ対策、男性の出産立合や家事・育児参加の一般化などは、生殖をめぐる男女の不均衡の非セックス化に他ならない。

共働き・ひとり親家庭の女性でも産みやすく育てやすい社会をつくること自体が生殖上の性差の縮小を意味する⁽⁴⁾。生殖的身体の構造・機能上の両極性は静的であっても、生殖やエロスをめぐる身体生活の性差は動的である。「女（男）の体に生まれた」というさいの「体 Körper」は非セックス化に対して閉鎖的だが、「女（男）の身になって考える」というさいの「身 Leib」は非セックス化に対して開かれている。「男は妊娠しない」「生殖において男女には絶対的な違いがある」といった紋切型の理解は、新皮質の進化的な意味を捉え損なっている。身体生活の性差を可能なかぎり縮めてゆける（反対に可能なかぎり広げてゆける）のが、ヒトの頭脳の進化的な意味であろう。

紙幅の都合上深入りしないが、エロスの身体性の性差にかんしては、その生理的な「不均衡」を是正すべく、女性の性的権利と男性の性的義務を規定する議論がある。Victoria C. Woodhull (1874: 40) から田村公江 (2009: 190) まで。また官能的技法の方面では *The Hite Report* が展望を示す (Hite, 1976: 387 ff. = 1977: 523 ff.)。どれも、よりよい非セックス化を模索する新皮質の試みといえる。

共働き・ひとり親家庭の女性が産みにくく育てにくい社会では、男性の身体の外周部に女性が配置されており、産まない男性と産む女性（産みたい女性）との間に著しい非対称が見られる⁽⁵⁾。そしてレズビアン・フェミニストや E・K・セジウィックによれば、男性中心社会の根本原理は強制的異性愛である（この枠組みの中で女性の蔑視、同性愛の排除、少年愛の嗜好が制度化される）。ゆえに、労働する身体と産み育てる身体が融合しやすい社会をめざすことは、多様な性愛、多様な生き方が優劣なく認められている社会をめざすことにつながる。入れるトイレが男女で違うという非対称は許される。なれる職業が男女で違うという非対称は多くの場合改められてゆく。結婚相手の性が男女で違うという非対称（性生活の非対称）も、他の様々な非対称の是正に伴い、必然的に非セックス化してゆくだろう。

超セックス化という概念装置に、どのような実践的・思想的価値があるのか。それをまとめれば次の通りである。「赤裸々な本質主義」はセックス化のみを身体生殖の本質と捉えるので、性的少数者の位置づけが怪しくなり、出産奨励や同性婚反対などの規範に直結しかねないし、くわえて男女間の身体経験の非対称を是正する様々な取り組みが単なる社会的な

事柄として位置づけられてしまう。本稿の超セックス化論は非セックス化をもう一つの本質的な身体原理として認識するものなので、男女間の、生得的な「人体」の非対称にかんして可能なかぎりその性差を重視する方向と、日常生活での「憂き身／身軽さ」「身持ち」「身の振り方」の不均衡にかんして可能なかぎりその性差を縮小する方向とを、身体論の地平で統一させることができる。「生物学的な性差も大切だが、基本的人権も大切だ」という程度の考え方では「赤裸々な本質主義」を打ち負かすのは困難である。表向きは文化的・政治的な問題にしか見えないバラバラの出来事（性差医療・育児休暇・同性婚など）が超セックス化によって縫い合わされる。排他的な自然神話を乗り越えるという歴史の意味は、ヒトの身体の進化的な意味にもとづいている。

肝心なことは、ジェンダー化も非セックス化も生物学的な原理（新皮質の可塑性）にもとづく作用なのであって、一方が自然に適っていて、他方がそうでない、という話にはならない点である。裸で生れてきたわれわれにとって裸のまま生活するのが自然に適っている、と考えるひとは稀だろう。ヌーディストから武装警官までの振幅の大きさこそが、ヒトのヒトたるゆえんである⁽⁶⁾。

4. 生物学的セックスはジェンダーである？

従来の生物学・医学の性差観は、「身体／社会」や「生物学的要因／文化要因」といった素朴二元論にもとづいているため、「多様な生活形態を前提にした産みやすく育てやすい社会」の探究を通じて、生殖的・エロスの身体の実質上の男女差が縮まってゆくという現象を、生物学的な事態として捉える視点が欠如している。黒田ほか（2016: 22）の指摘する次の事実はあまりにも自明なので、かえって見落とされる。

「行動の生物学的要因と環境要因という対比は厳密に言えば適切ではなく、現在の行動はすべて現在の脳という生物学的要因の帰結であって、そして現在の脳を形成・制御するうえで過去や現在の環境が影響している部分と、影響していない部分があるというのが正確であろう。（中略）脳自体がもともと、社会のように、複数の相反する欲求や動機を含んでいるものなので、『攻撃衝動を引き起こす脳部位 A をもっているから、攻撃するのは仕方がない』と単純にいうことはできない。攻撃の結果を予測して瞬間的に A を抑える脳部位 B や、また長期的にみずからの環境や行動を制御することによって、攻撃衝動が発動するような状況自体を避けることを可能にする脳部位 C など、同時に持っているからである。」

新皮質による超セックス化の作用を度外視する記述は、局部照明であり偏向報道である。それは、動物の生得的な養育本能についてだけ記述し、養育放棄の必然的な可能性について触れないことに等しい⁽⁷⁾。偏向報道において述べられるヒトのセックス（つまり従来の生物学や医学において記述されてきたほとんどすべてのセックス）は、人工的な局部照明の産物

という意味で、ジェンダーの一種にすぎない。素朴二元論と局部照明は使い方次第では便利な手段となりえても、適用限界がある。「養育本能」と「養育放棄の可能性」を表裏一体で把握する必要があるように、身体の「セックス化」と「超セックス化」の二つの生物学的な働きも表裏一体で記述しなければいけない。ヒトのセックス化は超セックス化とのかかわりの中でしか現実たりえないからである。

長谷川は「男性＝狩猟者説」を無批判に支持するが、実際の狩猟採集社会では、男女の生殖的相違と社会的分業の対応関係は複雑であり、事実は従来考えられていたよりもずっと柔軟で臨機応変なものであるらしい (Jarvenpa and Brumbach, 2014; 今村 2000)。新皮質は一方で女性の身体を「生物学的宿命」に押し込め、他方で保育や狩猟に男女を等しく動員するのである。すでに触れたように、長谷川は有性生殖の進化の歴史を重視し、性差が個性の中に「消しがたく深く組み込まれている」と主張するが、その議論のなかでは新皮質の進化的な意味について言及していない。性差を縮小しうる新皮質の原理もまた、われわれの個性の奥底に深く組み込まれており、数十万年のホモ・サピエンスの歴史を背負っている。長谷川の性差論は、身体の基本として有性生殖の進化的原理だけを強調し、新皮質による超セックス化の進化的意味を度外視する点で局部照明であり、偏向報道である。ゆえに、長谷川がヒトにかんして記述するセックスはすべてジェンダーに他ならない。

おわりに

男の身体は「オス（精子提供個体）になれたとしてもやがてはオスをやめてゆくとともに、意識的にメス（出産個体）との違いを広げることも縮めることもできる身体」であり、女の身体は「メスになれたとしてもやがてはメスをやめてゆくとともに、意識的にオスとの違いを広げることも縮めることもできる身体」である。繁殖方式の進化の秘密に関わるセックス化や、それを文化的に押し固めるジェンダー化は、身体／脳／心における深刻な現実である。しかし今日、新皮質による非セックス化がヒトの身体経験と生活体系とをいよいよ変革しつつあることも、否定しがたい現実なのである。われわれの身体のセックス化の重みは新皮質による超セックス化の重みと釣り合う。ヒトには性差をめぐる二つの「本質」が存在する。もちろんこの仮説はセックス化を一つの身体的本質として認めるという現実的な選択から出発するものであって、身体と本質については色々な見方が可能である。

現代文明は「多様な生活形態を前提にした産みやすく育てやすい社会」を目指して試行錯誤している。これが実際に「男性中心文化＝強制的異性愛」の解体と並行していることは現象的に明らかである。多様な愛のかたちを認め合うことで、生殖的・エロスの身体の非セックス化は徹底される。

本稿には不十分な点も多い。まずセックス化と超セックス化にかんしては、最新の科学的知見にもとづく、より一層の合理的補強が求められる。生殖技術問題や、所謂「トランスジェンダー」については知識不足のため言及を避けた。また本質主義や進化論をめぐるジェ

ンダー研究の様々な立場や見解は、もっと広く詳細に把握される必要があるだろう。そして何より、身体論は究極的に存在論・認識論・宇宙論でなければ理論として十分とはいえない。J・バトラーが企てた主語批判としての身体批判の意義は計り知れないと筆者は考えるが、この大問題は今後の課題としたい。

注

- (1) 新しいマテリアル主義のフェミニズム版では構築主義によって「言説」の影に追いやられた“matter”（ないし“materiality”）が、ジェンダー／セックスを相対化する本質として捉えられ、解剖学的身体に先立つ本源的・普遍的な活力として重視される（Cf. Sheldon, 2015; Alaimo and Hekman, 2008）。
- (2) 脳の新旧の区別は個体発達の水準では有効でも、系統進化学上は無効である。古脳に新脳が付け加わるという直線的進化モデルは21世紀に入って否定された（Emery and Clayton, 2005）。爬虫類でさえも新皮質に相同する領域をもっている。爬虫類とヒトの脳の違いは、特定部位の有無ではなく、諸部位の発達の割合の違いである。
- (3) 幼児に見られる興味対象の性差や趣味嗜好の性差は、ジェンダー・バイアスの結果というよりも、強く生得的なものであるとされる（坂口 2017: 107-108）。
- (4) 田中（2008: 178）のいう性差縮小とは、ジェンダー・バイアスの排除によって新脳に男女差が形成されないようにすることをさすので、本論の非セックス化よりもかなり限定的である。
- (5) 早い段階で共働き家庭の女性が比較的に産み育てやすい社会になっ^てしまっ^ている地域（例えば北陸地方）は、むしろ保守的な価値観が根強い。この問題には触れない。
- (6) しばしばジェンダー化は非セックス化と結合する。例えば男性の存在を強制的異性愛の権力と関係づけるジェンダー化は、政治的・エロ的な不均衡を非セックス化するための前提となりうる。
- (7) 黒田ほか（2016）によると、ヒトを含む哺乳類の脳のなかに、新生児に対する養育行動をつかさどる神経回路が進化的に保存されているとする仮説は「相当に堅牢で信頼できる」ものであるらしい。他方で、環境ストレス、脳の器質的な損傷、若年出産、オスの交代などの条件によって、メスが養育を放棄する例は動物全般に見られる。つまり養育欲求も養育放棄も、状況次第で発現される生物学的な可能性である。「養育本能」の引き金となる至近要因は、子どもを「かわいらしい」ものとして認識する先天的な仕組みにあるのだという（その究極要因は自己複製原理であろう）。

参考文献

- 今村薫（2000）「ジェンダーから見た狩猟採集社会」『名古屋学院大学論集社会科学篇』37(2), 43-52.
- 上野千鶴子（2008）「ジェンダー概念の意義と効果」『性差とは何か』26-37. 日本学術協力財団.
- 荻野美穂（2002）『ジェンダー化される身体』勁草書房.
- 海妻径子（2008）「フェミニズムは男性身体を語るか」金井淑子編『身体とアイデンティティ・トラブル：ジェンダー／セックスの二元論を超えて』49-68. 明石書店.
- 金井淑子（2008）「フェミニズムと身体論」金井淑子編『身体とアイデンティティ・トラブル：ジェンダー／セックスの二元論を超えて』19-48. 明石書店.
- 河上睦子（2005）「「フェミニンな身体性」理論とはなにか」『現代の理論』Vol. 5, 115-120.

- 黒田公美ほか (2016) 「子どもの虐待はなぜ起こるのか：親子関係の脳科学」『ここまでわかった！ 脳とこころ』16–24. 日本評論社.
- 坂口菊恵 (2017) 「「認知の性差」議論の複雑な事情」『Japanese Psychological Review』60(1), 105–110.
- 千田有紀 (2006) 「ブレンダの悲劇が教えるもの」『大航海』No. 57, 134–141.
- 高木由臣 (2014) 『有性生殖論：「性」と「死」はなぜ生まれたのか』NHK 出版.
- 田中（貴邑）富久子 (2004) 『脳の進化学：男女の脳はなぜ違うのか』中央公論新社.
- (2008) 「脳の性差」『性差とは何か』170–180. 日本学術協力財団.
- (2013) 「Think about Women 女性について考える：女性の脳と男性の脳はどう違う」『WHITE』メディカルレビュー社, Vol. 1(1), 52–55.
- 田中富久子・長谷川真理子 (2006) 「生物の性差、ヒトの性差」『大航海』No. 57, 90–110.
- 田村公江 (2009) 「性の商品化：性の自己決定とは」『岩波講座哲学 12：性／愛の哲学』169–203. 岩波書店.
- 団まりな (2010) 『性と進化の秘密：思考する細胞たち』角川学芸出版.
- 東村博子 (2008) 「性差とは何か？」『性差とは何か』153–168. 日本学術協力財団.
- 荷宮和子 (2006) 「男が罪を犯したのではない、男であることが罪なのだ」『大航海』No. 57, 142–159.
- 長谷川真理子 (1993) 『オスとメス＝性の不思議』講談社現代新書.
- (2008) 「性差とジェンダー：進化生物学の視点」『性差とは何か』144–152. 日本学術協力財団.
- (2018) 『世界は美しくて不思議に満ちている：「共感」から考えるヒトの進化』青土社.
- 松浦健二 (2003) 「シロアリにおける単為生殖の進化と適応的意義」『蛋白質核酸酵素』48(12), 1702–1710.
- 松田昌子 (2008) 「性差医療の今後」『性差とは何か』251–262. 日本学術協力財団.
- Alaimo, Stacy and Hekman, Susan (2008) “Introduction: Emerging Models of Materiality in Feminist Theory,” in Stacy Alaimo and Susan Hekman (eds.), *Material Feminisms*. Bloomington: Indiana University Press, 1–22.
- Arnold, A. P. and McCarthy, M. M. (2016) “Sexual Differentiation of the Brain and Behavior: A Primer,” in D. W. Pfaff and N. D. Volkow (eds.), *Neuroscience in the 21st Century*. New York: Springer, 2139–2168.
- Burr, Vivien (2002) (1st ed. 1998) *Gender and Social Psychology*. London: Routledge.
- Butler, Judith (1994) “Gender as Performance: An Interview with Judith Butler.” Interviewed by Peter Osborne and Lynne Segal. In: *Radical Philosophy*, 67, 32–39.
- (1999) (1st ed. 1990) *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, Tenth Anniversary Edition. New York and London: Routledge. = (1996) 竹村和子訳『ジェンダー・トラブル』青土社.
- Cocks, Harry G. (2013) “Approaches to the History of Sexuality since 1750,” in Toulalan, S. and Fisher, K. (eds.), *The Routledge History of Sex and the Body, 1500 to the Present*. London: Routledge, 38–54.
- Cruzan, Mitchell B. (2018) *Evolutionary Biology: A Plant Perspective*. New York: Oxford University Press.
- Cutter, Mary Ann Gardell (2006) “On women’s health care: In search of nature and norms,” in Mark J. Cherry (ed.), *The Death of Metaphysics; the Death of Culture: Epistemology, Metaphysics, and Morality*. Dordrecht: Springer, 199–217.
- Delphy, Christine (1981) “Le patriarcat, le féminisme et leurs intellectuelles,” in *Nouvelle Questions Féministes*, No. 2, Octobre, 59–74. = (1996) 井上たか子ほか訳「家父長制とフェミニズム、

- それに関わる女性知識人」『なにが女性の主要な敵なのか』173–196. 勁草書房.
- Emery, N. J. and Clayton, N. S. (2005) “Evolution of the avian brain and intelligence,” in *Current Biology*, 15, R946–R950.
- Hite, Shere (1976) *The Hite Report: A Nationwide Study on Female Sexuality*. New York: Macmillan. = (1977) 石川弘義訳『ハイト・リポート：新しい女性の愛と性の証言』(Part1, Part2) パシフィカ.
- Jarvenpa, Robert and Brumbach, Hetty J. (2014) “Hunter-Gatherer Gender and Identity,” in Cummings, V., Jordan, P. and Zvelebil, M. (eds.), *The Oxford Handbook of the Archeology and Anthropology of Hunter Gatherers*. New York: Oxford University Press, 1243–1265.
- Mellor, Mary (1992) *Breaking the Boundaries: Towards a Feminist Green Socialism*. London: Virago Press. = (1993) 壽福眞美ほか訳『境界線を破る！』新評論社.
- Meyer, M. L. *et al.* (2003) “Empathy for the social suffering of friends and strangers recruits distinct patterns of brain activation,” in *Scan*, 8, 446–454.
- Sax, Leonard (2002) “How Common Is Intersex? A Response to Anne Fausto-Sterling,” in *The Journal of Sex Research*, 39(3), 174–178.
- Sheldon, Rebekah (2015) “Form/Matter/Chora: Object-Oriented Ontology and Feminist New Materialism,” in Richard Grusin (ed.), *The Nonhuman Turn*. Minneapolis: University of Minnesota Press, 193–222.
- Stone, Alison (2007) *An Introduction to Feminist Philosophy*. Cambridge: Polity.
- Tuana, Nancy (2005) “Sex and the Body in Science,” in S. Restivo (ed.), *Science, Technology, and Society: An Encyclopedia*. Oxford: Oxford University Press, 562–567.
- Vidal, Catherine et Benoit-Browaeys, Dorothée (2005) *Cerveau, Sexe & Pouvoir*. Paris: Belin. = (2007) 金子ゆき子訳『脳と性と能力』集英社新書.
- Wagner, D. D. *et al.* (2016) “The Dorsal Medial Prefrontal Cortex Responds Preferentially to Social Interactions during Natural Viewing,” in *The Journal of Neuroscience*, 36(26), 6917–6925.
- Woodhull, Victoria C. (1874) *Tried as by Fire; or, The True and the False, Socially*. New York: Woodhull & Claflin.

【おぐら けんじ／哲学】